体育におけるアダプテッド・スポーツの教育的効果に関する研究
―教員養成学部生を対象とした授業実践を通して―

田邉　瞳（群馬大学）

Ⅰ．はじめに

2020 年の東京オリンピック・パラリンピック開催に伴って、障害者スポーツには大きな関心が寄せられている。近年では、それに代わる言葉、新たな概念として「アダプテッド・スポーツ」という言葉が用いられるようになってきた（大山、2017）。一方、中学校学習指導要領解説保健体育編（文部科学省、2017）には、体力や技能の程度、性別や障害の有無等に関わらず、運動やスポーツの多様な楽しみ方を共有することができると明記され、アダプテッド・スポーツを授業に取り入れることは有効ではないかと考えられている。

しかし、アダプテッド・スポーツの授業実践に関する先行研究は少なく、具体的な指導については明らかにされていない。

そこで本研究では、教員養成学部生を対象とした質問紙調査、ゴールボールの模擬授業の実践を行うことにより、アダプテッド・スポーツの認知等の現状を把握し、それらに対する意識の変容をとらえ、体育授業におけるアダプテッド・スポーツの教育的効果について検討することを目的とする。

Ⅱ．研究方法

１．文献調査

２．質問紙調査

対象　　：G 大学教育学部生 144 名
期日　　：2019 年 12 月 10 日㈫・13 日㈮
調査内容：障害者スポーツ等の認知等を調査。
調査方法：無記名で、質問紙調査を実施。
分析方法：項目ごとに人数を集計し、割合を算出。

３．模擬授業の実践及び評価

対象　　：G 大学教育学部保健体育専攻学生 18 名
期日　　：2019 年 12 月 19 日㈭
単元　　：ゴールボール
調査内容：①授業前後に２の質問紙調査、②授業後に感想（自由記述）を収集。
分析方法:①授業前後の得点差､②記述内容の検討。

Ⅲ．結果及び考察

１．文献調査（アダプテッド・スポーツの概念）

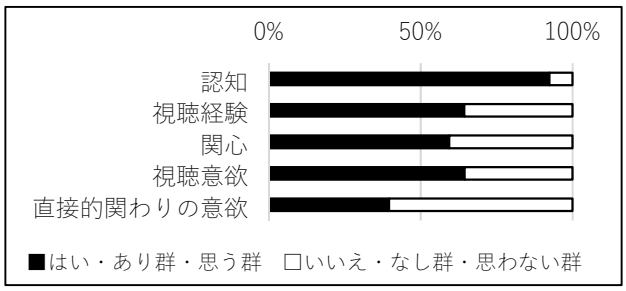
本研究では､「スポーツのルールや用具を、そのスポーツを実施しようとする人の特性に適合（adapt）させることによって、障害をもつ人を含めた、幼児から高齢者、体力の低い人でも誰でも参加できるスポーツ」と定義する。

２．質問紙調査

障害者スポーツについて聞いた（図 1)。「障害者スポーツ」という言葉は、全体の 9 割を超える者が知っており、学校の授業を通じて情報を得た者も多く、児童・生徒に知識として教えることが大切であるといえる。

また、全体の 6 割以上の者が観たことがあった。関心がある者の割合は、全体の 6 割にとどまり、同様に、視聴意欲がある者も約 6 割であった。

直接的関わりの意欲について、「思う群」に比べ、「思わない群」の人数が多かった。



【図１　障害者スポーツについて】

３．模擬授業の実践及び評価

保健体育専攻学生を対象に、ゴールボールの模擬授業を実践、評価した（表 1)。

【表１　授業前後の項目ごとの得点の平均】

項目	授業前	授業後	
①障害者スポーツへの関心	3.17	3.72	＊＊
②パラリンピックへの関心	3.22	3.61	
③障害者スポーツへの視聴意欲	2.94	3.50	＊
④パラリンピックへの視聴意欲	3.11	3.63	＊
⑤障害者スポーツに対する直接的関わりの意欲	2.56	3.21	＊＊
⑥パラリンピックに対する直接的関わりの意欲	2.75	3.29	

＊p＜0.1　　＊＊p<0.05　　（点）

①、③、④、⑤において、模擬授業前より授業後が有意に高くなった。よって、ゴールボールの模擬授業を実践することは、障害者スポーツやパラリンピックへの関心・意欲の向上に対して有効であったと考えられる。

Ⅳ.結論

都道府県や市町村が主体となり、アダプテッド・スポーツについての出前授業等を行うことは、障害への理解を深められるという教育的効果があると考えられる。

さらに､アダプテッド･スポーツの授業の実践は、障害者スポーツやパラリンピックへの関心・意欲の向上に有効であり､知識及び技能や学びに向かう力、人間性等を学ぶことができると結論づけられる。

Ⅴ.主な引用・参考文献

大山祐太（2017)「大学の一般体育におけるアダプテッド・スポーツ実践の教育効果」北海道教育大学紀要（教育科学編）第 67 巻第 2 号：267－276
佐藤紀子（2012)「アダプテッド・スポーツ」の授業が歯学部生のスポーツや障害者に対する意識に及ぼす影響　日本大学歯学部紀要第 40 巻：49-56